



生活様式が大きく変わったJAや組合員の皆さまに贈る日本農業新聞の  
読みどころ集です。「この1週間を振り返る」ため週刊でお届けします。



日本農業新聞の読みどころ

週刊ダイジェスト

2022年1/15〜21付

最終号

創刊からちょうど50号  
ですが、今回でいっ  
たん休刊いたします。

# 子実コロン増産促す

## 農水省 転作・機械導入に助成

農水省は2022年度、水田転作で飼料作物の子実用トウモロコシの増産を促す。水田リノベーション事業の対象に加え、10畝当たり4万円を助成。都道府県の計画に位置付けられた産地には、水田活用の直接支払交付金で同1万円を加算する。作業に使う機械の導入・リース費用の半額を支援する事業も用意した。輸入飼料の価格が高騰する中、飼料自給率の向上を目指す。▼15面に関連記事

### 子実用トウモロコシへの主な支援策

水田リノベーション事業	10a当たり4万円	重複不可
水田活用の直接支払交付金	同3万5000円	
戦略作物助成	同1万円	重複可
水田農業高収益化推進助成	同1万円	
畜産生産力・生産体制強化対策事業		
収獲用のアタッチメント、乾燥機などの導入・リース費用の半額を助成		

前年産では子実用トウモロコシは対象となっていなかった。一方で、22年度予算案に3050億円を計上している水田活用の直接支払交付金では、戦略作物助成として同3万5000円を助成する。同交付金では「水田農業高収益化推進助成」も用意。都道府県が策定する推進計画への位置付けを要件に、20年度の飼料自給率

農水省は2022年度、水田転作で飼料作物の子実用トウモロコシの増産を促します。水田リノベーション事業の対象に加え、10畝当たり4万円を助成します。都道府県の計画に位置付けられた産地には、水田活用の直接支払交付金で同1万円を加算。機械の導入・リース費用の半額を支援する事業も用意しました。農水省は輸入トウモロコシの価格高騰を背景に、飼料自給率を上げる目標を掲げています。(1/18付1面)



農水省は登録品種の海外での育成者権保護へ「防衛的許諾」の普及に乗り出します。許諾料をもらって他国の特定の生産者団体に、その国での独占栽培を認める代わりに、無断栽培など違法事例を監視してもらう仕組み。開発者が実際に無断栽培など権利侵害があるかどうかを、現地で調べることは難しいですが、現場を熟知する生産者団体に監視を頼むことで、開発者の監視コストが低減でき、現地生産者も独占販売ができます。(1/19付1面)

## 日本品種の独占栽培団体が監視

# 「防衛的許諾」普及後押し

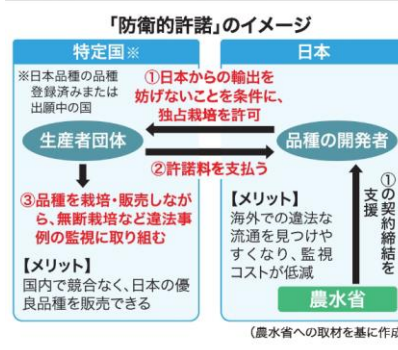
農水省

農水省は品種登録した品種(登録品種)の海外での育成者権保護へ、「防衛的許諾」の普及に乗り出します。許諾料をもらって他国の特定の生産者団体にその国での独占栽培を認める代わりに、無断栽培など違法事例を監視してもらう。品種開発者が、生産者団体に当該品種を国内限定で販売するなど、日本からの輸出を妨げない契約を結ぶことを条件に、契約締結にかかる費用を助成する。

## 海外の違法例発見へ

同省は防衛的許諾に取組む品種開発者向けの契約締結に必要な費用の3分の2の助成を始める。2022年度補正予算で3億3900万円、22年度当初予算案で1億7700万円を計上した「植物品種等海外流出防止総合対策・推進事業」の中で支援する。

種を、海外で無断栽培などの取り締まり対象とするには、現地でも品種登録が必要。同省は海外での登録出願を支援し、21年9月末時点で17品種が登録された。だが、実際には無断栽培など権利侵害があるかどうかは、開発者自身が現地で定期的な調査を行う必要がある。現地の生産者団体が品種開発者へ



(農水省への取材を基に作成)

大型鳥「エミュー」による町おこしが佐賀県基山町で進んでいます。耕作放棄地での放牧が広がり、飼養羽数は500羽に。深刻化していたイノシシによる農作物被害も、エミューを放牧すると減りました。町はジビエ解体処理施設を整え、イノシシの肉とともに利用を進めています。法人は学生と連携して、エミューを使った万能ソースなど開発しました。(1/19付15面)

**放棄地で500羽放牧 町おこしに**

エミュー オーストラリア原産の大型鳥。11月から翌3月に産卵期を迎え、生後16カ月で体長1.7mほどの成鳥となる。体重は40~60kg。人に対しては温厚で飼いがやすい。肉と卵、羽根、皮、脂肪と用途が多岐多彩なのが特徴だ。

**エミュー 飛ぶ鳥落とす!?**

佐賀・基山町

地域では休耕田が増え、イノシシによる農作物被害も深刻化している。だが、エミューを放牧するとイノシシは近寄らなくなった。町は、エミュー(野生動物の肉)解体処理施設にエミュー用処理室を設け、町内で生産と利用の輪が広がりを見せる。(二宅 映木)

栄養豊富、串焼きに ■ 産学連携で万能



エミューを使った焼き鳥。左からハツ、肉、レバー (佐賀県基山町で)



## サツマイモ産地北上中

東北でサツマイモの産地化の動きが広がっています。需要の増加や主産地・九州で基腐(もとぐされ)病が広がり、実需が新たな産地を求めています。宮城ではJA全農みやぎが中心となって栽培を推進。国内の健康志向や輸出需要の高まりで追い風。宮城県山元町の(株)やまもとファームみらい野は2015年から栽培を始め、全農みやぎを通じて香港に120トンを輸出する予定です。東南アジアや中華圏では、日本の高糖度サツマイモが人気です。(1/18付13面)



福島県田村市 昨年からの貯蔵施設稼働

東北でサツマイモの産地化の動きが広がっている。需要の増加や主産地・九州で基腐(もとぐされ)病が広がり、実需が新たな産地を求めているから、宮城県ではJA全農みやぎが中心となって栽培を推進。国内の健康志向や輸出需要の高まりで追い風。宮城県山元町の(株)やまもとファームみらい野は2015年から栽培を始め、全農みやぎを通じて香港に120トンを輸出する予定です。東南アジアや中華圏では、日本の高糖度サツマイモが人気です。

「保管庫の容量が300トンだが、需要としては150トン程度で栽培を始める。国内の健康志向や輸出需要の高まりがある。総務省家計調査による1人以上世帯の20年のサツマイモの消費量は1.5kgで、前年比で1.5倍ほど増加。干し芋売り上げが好調だ」といふ。同社は全農みやぎと連携して、エミューを使った万能ソースなど開発しました。

全農みやぎ 旺盛な需要さらに拡大



日本農業新聞 東北支所 副支所長 小島慶太  
「週刊ダイジェスト」創刊から50号を迎えました。コロナ禍で往来が制限される中、より多くの方が弊紙に関心を持ってもらうため発行してきました。昨年2月から毎週、ニュースを振り返るために配信してきましたが、今回でいったん休刊とさせていただきます。皆様から多数のご愛顧を頂き、とても励みになりました。実は2月の人事異動で、本所に帰任します。4年間の東北生活でしたが、皆様には真摯にご対応いただき、深く感謝しております。ご当地の歴史や文化などを学びました。その真髄を知ることなく離任するのは残念ですが、私のルーツでもある東北を今後も見守り続けてまいります。

## 2月人事で帰任「4年間 お世話になりました」

日本農業新聞 東北支所 次長(編集担当) 原尻大志  
東京への異動に際し、この4年間の取材等で得た資料の中で、不要なものは処分し、後任デスクや後輩に残した方が良いでしょうと整理しました。久しぶりに過去の資料に目を通すとデスクでありながら、取材をはじめ、研修会講師、各種会議、審査員等いろんな仕事を経験できたのだと感謝の気持ちでいっぱいです。日が経つにつれ、寂しさやすがすがしさのある何とも言えない心境です。事務所に出勤するのは27日が最後です。東北に来てよかったです。お世話になりました。ありがとうございました。

